

「純生」のくまもとの水。 このおいしい水を 21世紀へ残すために。

「肥後の水資源愛護賞」

「水は生命の源であり、私達が健康で快適な生活を営む上で、欠くことの出来ない有限の資源である。」と、水資源の保全に関する行動の実践を



広く県民に訴えていくことを目的とした

「肥後の水資源愛護賞」

創設に当り大変ご尽力された、

肥後銀行の長野吉彰頭取に、賞の紹介と共に、

くまもとの水を守ることをテーマに

お話を伺いました。



●肥後銀行頭取 長野 吉彰さん

きれいな水がいつぱいに張っていた江津湖や八景水谷。昔、水は神聖なものだった。

私達が小さい頃は、江津湖や水前寺、八景水谷というのは、きれいな水が一ぱいでよく魚捕りや遊びに行っていたんですが、頭取さんの小さい頃はどうか。

長野 私は子供の時から、水遊びがすごく好きで、小中学校の頃は、専ら、上江津や八景水谷にアブラメやシビンタを捕りに行っていましたよ。アブラメという魚は、本当にきれいな水にしかいないんです。

昔は、水を得るといことが非常に大変じゃあなかったかと思うんですが、昔の人はどういう考えを持っておられたんでしょうか。

長野 人間、絶食したって二十日位はもつてすね。ところが、水を飲まないと、二、三日で死ぬそうです。それ程水というのは大切なもので、我々の先祖にとっては、神聖なものだったんでしょう。「水神さん」や神社の「御手洗水」とか「みそぎ」等という言葉からしましてもね……。

長崎時代の湯水の経験で痛感！
熊本の上水道のおいしさ。

肥後銀行という県民の金融機関で今度の賞をお考えになったのは、何か社は社訓といたったものが根底にあるんですか。

長野 いや別に社は、社訓という程のものはありませんが、行歌の中に経済産業面の使命だけでなく、「いそしめる家庭に奉仕すわれら……共栄の誓いとも果さん」という一節があります。県民皆様へのお手伝いということは、

意識的な理念だと思っています。それよりも私が今度の様なことを考えました直接の動機は、二十年ばかり前、三年間、長崎の支店長をやったんです。向うで暮らした二年目だったか、ものすごい湯水で一日平均二時間、しかも何となく臭いがする送水という時期が続いたんです。あの時、素晴らしい地下水だけに頼っている熊本市の上水道のおいしさを夢に見たものです。その経験から余りにも恵まれていたため油断して、いずれ大変なことになると、二、三年来、熊本経済同友会でも重要な課題として勉強を始めていたわけです。また、「明日へのシナリオ」とその補完としての「県土デザイン編」の中にも「水」と「緑」が中心的に取り上げられていますね。「水と緑」を重心とした田園文化圏構想というものは、決して単なる精神論ではなく、むしろ21世紀に向っての日本人の生き残り戦略として避けておられない自然の生態系と先端技術の調和整合努力という先取りの発想であろうと受け止めております。それに対するご協力ともなればとも思っています。

今度、愛護賞をおつくり頂いた訳ですが、どんなものを授賞の対象に考えておられますか。

長野 私は研究とか提言とかいうものは、ご存知のとおりすでに、県、市や開発研究センター等が専門の先生方によりかなり立派な労作が進んでおりますので、あえて対象とすることは、御遠慮しようと思っております。ささやかなことでもいいから実践的、それも一時的なものではなく、継続的に、地道な努力が続けられているといったものを対象にしたいと、熊本日日新聞の永野社長さんと話し合った次第です。